

気象庁, 1984: 昭和57年7月豪雨調査報告, 気象庁技術報告, 105, 113-159.

塩月善晴, 1985: 複数雨滴集団モデルによる極値雨量強度曲線からの雨滴粒度分布の再現, 天気, 32, 553-563.

Talbot, A.N. 1891: Rate of maximum rainfall,

Technograph No. 5, Univ. of Illinois (岩井重久, 石黒政儀, 1970: 応用水文統計学, 森北出版, 東京, 370, による)

長崎大学学術調査団, 1982: 昭和57年長崎豪雨による災害の調査報告書, p. 145.



海野和三郎・上田誠也・
駒林 誠・木村龍治ほか

改訂 地 学

1986年 304頁 東京書籍 745円

本書は高等学校における選択科目地学用の教科書である。現在高等学校においては、必須科目として理科I(物理・化学・生物・地学を含む基礎科学)を学び、その後選択科目としてそれぞれの科目を選ぶことになっている。現在選択科目地学用教科書は私の知る限りでは8種類ほど出版されている。いずれも複数の著者によるもので、その中には当会員である先生方のお名前が何人か拝見される。これらの先生方による気象の部門はいずれも、創意とご苦心の程が伺え、ご立派な出来栄と拝見する。その一つとして本書を紹介したい。従来の地学というイメージは気象分野の者から見るととかく地質地史系の色彩が濃いと思ひ勝ちであるが、この傾向は徐々に変化しつつあるように思われる。特に本書は、固体地球、大気・海洋、天文・宇宙がうまく融合整理されており、最近の地球科学の進歩に合わせて新しい地球観が得られるように配慮されている。しかも、記述がやさしくて読みやすく、教科書としては親しみやすい。

本書の構成は次の通りである。

- 序 章 水と大気と生物界 (10頁)
- 第1編 地球は生きている (120頁)
- 第2編 地球をめぐる風 (88頁)
- 第3編 地球をとりまく宇宙 (74頁)

内容は第1編に、地球の内部構造、地震・火山、地形・地層、大陸移動から環境変化と生物の進化、地史を含ん

でいる。第2編は気象と、気候を調節する海洋である。第3編は太陽系、恒星、銀河、膨脹する宇宙から太陽系の歴史が含まれている。地球科学全体を固体地球と大気・海洋と天文・宇宙の三つに分けてしまったのはスッキリとして全般としての把握と理解を容易にしている。

著者の中に駒林誠・木村龍治の両氏の名が見えるので第2編は両氏の著作であると思われる。内容に両氏の特徴がよく出ているようである。第2編地球をめぐる風の内容は次の通りである。

1. 大気圏の立体構造
2. 地表付近の大気の性質
3. 晴れのち雨の天気現象
4. 四季によって変化する日本の気候
5. 地球をめぐる風
6. 気候を調節する海洋

わずか90頁たらずの中に、雲物理から各スケールの現象、気候変化からバンアレン帯や惑星の大気までが、平易な語り口で述べられていて興味ぶかい。新しいタイプのユニークな気象入門編といえる。挿入されている図版は目新しいものが多く、見ていて楽しい。例えば、大阪市付近の陸風と海風の交代、大手町と小金井市の気温の垂直分布の比較、アジアの冬(夏)の地上風、ピーカーを使つての成層の安定の実験等々である。気象編に限らず巻頭の口絵も斬新なものが多いが、中でも見開き2頁の中に十種雲形全ての雲写真がカラーで入っており、しかも覚えやすいようにその配列にまで気を配ってあるのは嬉しい。およそ気象の本は沢山出ているが、雲の写真全部が揃っている本は少ない。

本書は好個の地球科学入門書であると共に、新しい感覚の気象学書といえよう。一般の人の目に余りふれることの少ない高等学校教科書にこういう好著のあることを紹介したく、あえて一筆した次第である。

(島田 守家)